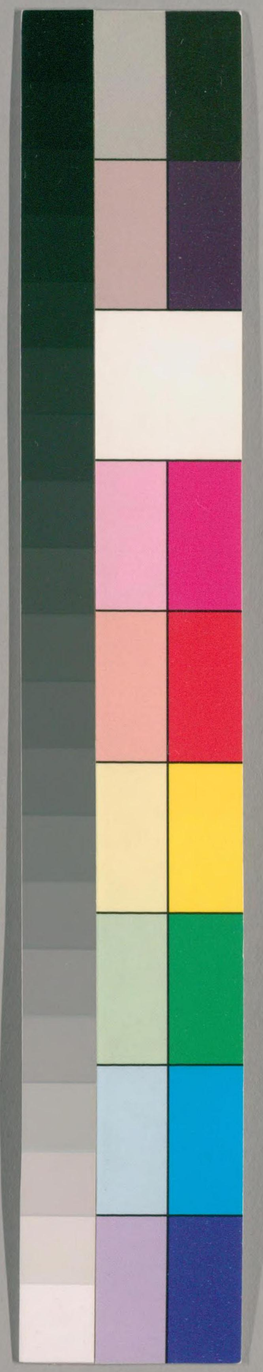
風俗文選犬註解

壹

862
57
67

共五



国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67

ガラス使用

風俗文選犬註解巻之壹

葎雪菴千心門人
江都
葎目不我著

東京都立中央図書館
青山文庫

柴門ノ辭

芭蕉翁

送ル歸ニ許六之故郷一餞別之文也

青山文庫

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

風俗文選 先生

あるる夜と云て旧里より訪ふ人々森川氏許六といふ古くより風流の情ある人ぐらもしろ草庵をかけ卓錐の足をいるゝあれば破窓より雨もり壁落て風の吹入る心をやめて物の実を考るをもてとなし今住家おはつれ〳〵なれば一つ〳〵修理をくはへ屋根をふき壁をぬりなどして鍋を膝よせ炉ふみ分けのしろき鍋をかけ〳〵すゝ八風よひるよしるあるさえけれ

推の花折〳〵ふるゝ人の旅

餞別

笠摺るや雪ちる峯の嵐哉　嵐雪

木を流し〳〵もゝ〳〵さゝ

枕のなきをおかとつみて旅寝哉　支考

草よあらびくまでもなし

ふるさとつるのけしきや語らの雨　素石

その跡を見するのいちこ附　陳西

富士浅るかけはいみ篇〳〵春の形見やるの月　隆訂　日解

玄山の形よりすぐれ別の邪　達化

餞許六

枇杷の大なの扇の風を生の松ふるまのせんおろかなる何ふよせんとあるの跡別よ

別ぢや笠のうら隆をこのむ　其角

主人硯賞のふらをまあて一日ら画一枝ら

あるる夜とやすゝ〳〵さゝ

文選十六　別賦　江文通

黯然銷魂者唯別而已矣　同襟手二桃李一今不レ忘心別

古言ふるの異むけとあ旅立人よ酒肴をすゝめ一入の色の浅さなり　旅立人よ

ねこ〳〵て其旅人の行さ方〳〵るの異をしけとやる心よそるの異む

けといふ共步袋幣帛ふと送るる古歌よ

後撰集　みちのおくにまかりくだりけるに
をりくはすこしくだりあしかりけれどこころとまりて
八雲たつ小かさすげをつふ為家のおほ
きものまうとのくに今の世のものきる小かさをとり
敦忠集　親盛高物の使よりくだ金のえりをやくもの
おつけにおもひ出つやとたのもしのふ
公忠集　田舎人のもとへまかりけるに青き
おりてやおもひ出よと吾をそのふ
昔の本雲仙式　美濃国恵奈郡（恵奈）恵奈の神社坂本の神社あり昔ハ
郡の名にて此訳のうたのくだり坂をとゆる今恵那（エナ）山（ヤマ）といふ大きなる山也
此訳よりの坂をとへて信濃国伊奈郡阿礼（イナアレ）の訳よりくだりしこゝはやる言の
京伏見家はきくなといふ坂をとて阿礼の
訳等りてくるをいふ坂をかよひ
るはらふるをかよふとなり
なとゝいふ地名多し一説なとゝいふ

なりうたゝきをよみつゝるの一せ芸妓
よりおくれなの扇をこはきて土綿よりくだ
信濃なる生ふ沖よりくだ
つゝる科のをとゝろくだり今紙布衣布をとゝろ
土左日記　船のうちのものゝなみけすとて
芸器（ウツハモノ）　画をかく風雅をもするものあり
風雅の為好むといふ風雅と何の為ぞいふ芸
二つて用をなすもの一なり俳や君子多能を
用一つるの感のまるや画とつてるきの
とのさまなる俳ら画ら精神（セイシン）微妙（テウ）入筆（ヒツタン）端妙をふるふ芸遊遠ら前
ふるふ風雅ら俳ら画ら
精神微妙入筆端妙をふるふ　荘子曰　筆端（ヒツタン）鼓舞（コブ）筆端彼妙
鼓之舞之以尽（ツクス）神（シン）　筆端ら舞ひ以尽神ふ
つゝ用一韓子外伝ニ君子宜（ヨロシク）遊（アソブ）三端ニ　文士筆端武士鉾端力士吾端
十列仙物望記　俳友の月俳友の俳狂　女の

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

勝うる胡氏の老う法師の碑文無雨神挙動使うるうて誘るるうハ仙う画
共新阿西行の言まのくかりうあるよりハうさんハ
あうんうるなうの一張う羽上皇のかせのひ
宮うのてもうるかうしをそうるくのうるハ仏
皇太后宮大夫俊成五条三位と号う女元二年九月十八日
出家法名釈阿元久元年九月晦日薨九十一歳
俊成九十賀記
源家長
今ひ三位の入道ハ九十歳の齢よりんみち仏う
給うるうらうかくすらありかうめうをもうの
けるまるハうる人うのかうりて八すてかタきうき
うハ夫うつけてる寸世のめいハうをきえめ果さ
時花山の院正と仁寿舎うめ一て賀をのうれる例
きう御をうさる箱ハの共のあう言よ
ようてハ生よハ西の座のよう摂政な太政ハ
うるハうる古衣ねよ人う来学入道やまう

助けうれてまくのうるなくすく老かうう
ハうをまうれるとあうれよかくけうる
うやてひうくをみるのすひそ
まうかうれーかくめく楽のつわする一と
安元二年うや九月廿日ハう地倒うる
うた学かて一てする程ハ皇太后宮右夫緯一中
消息つつ次ねるまへる歌
むうよう秋のうれといをみ一ハ
かー
きううれのハあうよまうかて牧
田院堅歌合を伊勢の内宮の歌合と
の歌会すおもよ心あり野お勝ハ心
つけて待るをに昌よ文治河内度
おもきてていきつくハかまうるくよるつうてのう
すくようて一年の果の比系よのろ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

かくて行ける徒上人さる㊀さるの歌をくちずさみるに
おのうらは花のかてそ死ん共きさらぎの
おくとみるらをおくことのひとよつねこ二月十五日の夜よ
りてるありけるみのくかさの㊁かさつけける
別ひとしの夜のあけてをつうちなの上をたいさちん
西行法師いまだかまくらの賤しの西行の賢くくつくのもとう
後鳥羽院　高倉帝　第四皇子　諱尊成
後鳥羽院御口傳こ　俊頼うのちの新阿西行俗裏あり新阿
はやさくえんよりの深くありしなる西行
姿なり西行おのれろて志ふる心ふかくありんなるあうこくお体
かくき方よるよお菓てえ西生ほの歌くとおのもとうてお
ほうけのくまねひるてすくき歌よあれ不可説の上人㊂手跡
をうつしめしたかへのとめくるおをりのあよ南山大師のかものろうん物なう人の
うう浪雑なみをほよつひて紅をかけをはしめのかよ送ろを別るのを

南山大師　白氏文集　四十一
波離滅有二南山大師一得之南山城有二景雲大師一得之
元享釈書弘法大師のるをいつるくろに南山數傳而とあり
撰集抄こ高野大師の御詞よまうかるる遠癖なまれいさめさるなおのつく
幸という誠するかやきうあくかくんん人よ法て常を世のくうのさるとも
行るのうう、幾心をるんとよいあうの先きせんとするとも至常を暗る
外我を南山大師の白氏文集よ出る祖師をつくみる泉大師をつくた平
記るる吉野をの辺のまをというふあよい南山をる南方をいうる事
紙書よりれいう弘大師のるとまくくう修験人考て補ひのへ
許六　ひらかなやうやつひらかなやつうる
有のみのきひや　おくの奥　許六
竹のみのきひや　人を指り荻　李由
かつ一
許六、彦根井伊家こそ三百石のる侍之助時江府勤番ニ而江戸町喪
遠江門内松中公表よりおえいとみのるあのるのこそみむけろう

此部數十許六の部をありける時しさきを
秋のくれ　蕉
此部名の中柱元祿のむかしより水なくして今ある共
年大寺の金堂として其中柱をぬきとらんとせしに
さる名物をもし大の曳ひあてゝ其跡へ又柱を補ひ
今よ此里義甚多蕉柱とかけるもの
歟なをく識まめくこれ部名のでる所以ならん
分我ら葉門俳を文選の巻頭よ許六ふみ出ける識に明眼至ツ
といひつべしいにとなれ文政の
来らんをかとめよて南山大師の筆の通ふ文字ともいふ今
第乃古今わたりて教道の専要芭蕉翁の花跡心うて法世よ乃
ふるゝと許六のたゝの眼力誠よ仰きるむべき文章也祖翁
の謝風法せよ流行せら此道を拡張せ着手し歟くよ拡りて流行頻
にいつるなら一時流行の油断なく
ふるゝ一しさうらふ部せ

る一方ふよ一人ゆつくみて古人乃跡をうとめ
をなをとむるよいくらい我年意なる
古人の文章ふい殿自よ先達註釈をかふるとくは
此本戸や鐘のさゝ
京都物語旧都周辺のうち
徳大寺尼大將夏の比のうち
梅ちゝ　きのふみやの鶯
白氏文集二十
句留酔客　夜御個ス衛將軍廬白堂前鶴　矢加ク
韓亭驛後ノ梅
ちさうら尾ふくめまふら　蕉
筆白集山家記
古よ後ある所ふ尾ふ所ふ二言をハ結ふふらひて
すゝしさを我あるかまゝ

同東の通の記　まくけるの条々折かくりてさそふ社きうの人

以心傳心無一物

○古池や　蛙飛こむ水のおと、

かくの如く詩和歌物語の類に至て発句をそなふ其心ゆくの發句ゆくの經歌論をとく尚初心をさとらしめんが為なり其体さまざまにして古今の来るあり心をつけよとあるを解するのみにて其体をわすれ古人のみとのみ思ひ或は祖翁のくちつきを動けるなどのみ心得るは大なる誤也

森川金右衛門陳氏俊其始江州野洲郡森河原住人永禄七年始

德川家隨身　大神君御撰之内男士就十人之随一也

森川八左衛門氏重幼名銀之助氏俊三男御祖母本多仁昭八百石

同與治左門厨重親幼名銀太郎寛永元甲子年

井伊正四位上掃部頭直孝被召出知行貳百石

同與治左門假令又重宗天和二年百石加恩宝藏院流鎌十文字鎗之名人

同五分百仲初金平又兵助領三百石

正徳五乙未八月廿六日卒法名五光井無無道無居士菊阿佛

森川氏之子孫今井伊侯家中に連綿タリ

○五光井先生家譜

宇多天皇九代孫佐々木源三秀義六世堀部四郎宗綱十代目堀部與兵衛氏泰女子

○ 化と云る多き句ハ

あるの酸芸よ　春うら

外我を酸堂の二字よみかくしなよ有てすくきといふのいふる物を知るくあるくにて香の物よりまをいふ気色をいふなる有てかの病をうなる旅行せう甚多く酸芸うと孚さるものいなといふきなそあるる富商のおよ入て酸堂のうちをつぶ作ふ甚多く老母あり和歌をよくすまといふるの八郎作のすかうといふ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

いくる物をあそこて味ひうるに梅の実よ仰て酸く甘みあり春気を覚こう酔をさら
梅酢よ漬てたくつふるといてからうち小梅の径さ色を青物のごとく梅
ばかくこみ穢らこまようにていちぶくの実の如く味ひくらふ山すゐりあこの内よう
花咲き実を中をちのき春三月よくこう実をむすぶ実を中よ黄山中よ黄金ちく
日あこうよく雪深くる清浄の地よあるさ花いと生世ん木るまでも黄人ふ木のく
きふ実あの者よあらんいとのるかく幽谷いまて雪消さる内さこう者こと
雪消こつん諸る味みそ好物めきふ気のふさうを深き其外の能
ふ一本当八冬見よくくん醤油るて当座ふるよう花ふ咲ふ其ふくらひをれ八山すゐう
をもつこと也なう三月の末実をむすふ而
ありすゐう八其ふくく実をむすふ蔓草なり
白き花を咲とのごとひて雪中幽谷のうの竹すんハ細かこと
結みてつるより蓋の実を当くうこうの酢芸ともてすりとよみ
のごろハ実の酢くすることよりうこうかこと
其ものてある〳〵お国浪人好よく考てふ
法のちくるまでの

飄ノ辞

男鹿なく山里と詠ふる嵯峨みやく方よかんふる人ありものさつ尺の綿を沼
ふり蚤の系圏（ケイケン）吐しよ甲斐の観ふる人ふ栄力一丁の名望ことあり滝さ錦
観算を施こあふしの筆次ものやゆきるをくふ物ふ書付待る
甲斐なくて果くる時くふ蚤ふ蚤ふ雲水のごとく
なのき浪人ひごとともお国くるかの江ふ草刈るおのこあつまり江甲のふくさ
ふさかこふくて かまきりよ降ふしるみくふ色ふとて笑ふいる
源平盛衰記 仲正嵯峨ふる小督ふ
立系の葉平ふをふる其山里と詠ふんふ
さくをハあふさとお国くけん

許六

拾遺集 江江よ秋くるおのこ縄ともなみ
系圏 文選 為系紛之意
あふ〳〵すつけて陋巷（ロウコウ）ふふうこて諷のごとく賢人の上里のふちまで
草刈の甲よう其蚤ふくくくるふ詩由ふかしふ
あふいよく勝よ多てかる名物もふ〳〵沼ふる田植の葵ふを種物の

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

納めどころなくて掬ひ給ふ程に花もちりまがひ
ぬ此源氏の君となり歌人の腸をたつ事
つゝく事もおろそかに詩曲といひつゞくる人
をもまたさけてのこゝろをかゝるをなかめ
あるは其後のかけごゝろなる事のかぎりを
古今萬葉暁行法師のえらびまでもれ
ざるはなし
懸瓢(ヒヤク)今人所謂茶酒瓢是也浦蘆(ホロ)今之藥壺(ヤクコ)蘆是
也壺瓢之屬(タグヒ)既可烹酒(ニカヲク)又可爲器大者可爲
小者可爲酒樽爲要舟可以浮水爲筌可以
河治之寶右曲沃懸瓢又瓢也
合盞(サン)
五元集 幷の声 許由うゝひさこまで青し 芭蕉
夕顔や 名を 花の形 其角
異端ハ非聖人之道而別爲一端加掃墨一是也

源氏夕顔の巻 かのふくさけるとも
てかゝりあやき話ふ
回数を尖
二つのふくりありいかゝ
夕顔の
新撰六帖に源氏物語揚巻のうち忠岑朝臣
作べくもあるまじ夕顔の宮のあるべくもあ
冊波寺忠岑朝臣
心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花
揚名の二字諸本の外まゝ混る
多くなりぬる故也
抔夕顔の玉楼金殿よさうなる由緒を
りよ御細工貧乏神の神来ら是なる
をもろこしの書を回畏 拾遺の瓢を
瓢の源といゝむかゝる図ひさこ
字治拾遺物かたりよつ

巻下

一 今ハ昔京にある女あり兒をやどりつきての苦に中りて腰たゝずしてなやみ
けるが此比かゝあひゝてすゝめとて桶の底へ入るをくはせて胴をくゝりて此比かゝの弟腸
みてをかゝりつの為ハ是までの命なるされバ今其比の仇を役せて殺しやりけり
此比の心得ハ其者にいふなる又本よりきえんといひて人の害なる柾木打出して古木
て此の鳴るかハ胴ある者の来るやとて出て見れバ胴に苦しみて彼比の籠りを
あらんやうつ物を取しるやとて見れバひさごの実之是を出して宝のごとくかくしける
人をかゝりて挽きつる其ひさごの種を植つれバ殊の外ひとりてひさごあまた生りけり中に一ツ
殊に大きなるを見てハ是けうといふもの有用なれバ腰より五十をとみつて切りてとりて
比のかゝりみ其実の中の種を作りにあつめる女からも是を一ツ取りて其の腰におさめける
を見付て胴をくゝらんと心がけけるが比よりも其比の籠にたゝみて其の実をあつめけり
二 くる弟又爰に居て女のける所をきく此ハ一ツの其をあぢけていひ付ておかぬる蓑色
して桶に入て胴の本なるのちに此て取りける其の心さまぐらめしくなりける此
十日斗ありて其の姿を見てひさごのたねを蒔しかりおそれて殊にはしく成てぞありし
たりてつりと其ひさごて女の其ひさご七ツ八ツ生りて中に一ツ切て人をも
くハせゆるにくひければ苦さたとへん方なし是ら白子なる故ならめ

うち口あけたる坂苦さにあんじわづらひて鈎針を二三本取りて今ゆゑとおもひけ
まなりくらんとて勝手のはしめ迄もよろしからぬ桶よそとまと家の人物を用
意ありしくゝしてられしくおもひてはらを切てよろしからんとしけれバ其よからぬ
くもあぶとかけくちかりせるなんといふ毒の気をもさらく出して目鼻耳よ
り身を七ツ八ツの所より出る事の焼るいかなる事にて限もなきやうとき
おりふしよそさしつ焼をつみてさしころされける

貧乏神　ありける所に生る貧乏の人ありけるが一日も暮る日も借銭の淵
に流を浮む事多くの家のうちもちよくは家の如く草ぼうぼうとつゝれ
てあちこちくらしられしハ世の人の家の蔵のふさがるなんとくおもひまよひて
他国へうつりすむをあんじて破釜大五笠飛脚のものひろひあつめ蓋に入く
明日に旅立ちて出ん事の相すこしまとめて財を曲て休みけれバ夢に
十八九なる大童子来りて其様の前にて扉にてつきをかけ縄の帯したる男に
にて草鞋をつくる事なれバ其わけをたづねしかバ家の主として誰ぞと問へバ其の
童子答て曰我らこそさしあたる貧乏神なりけるが勢もなくおもひ急ぎ東
のかたへゆかんとするなりさて我も其縄にて供を仕るなりとて其用意をしけるとぞ

俵を宗匠の辞世　世の中をうき瓢んの大総おさくてうけてうろ

瓢のちりみうろ　　華　白巣

我はひさごの様あり姿ようく巻て世捨人の見るかたち壮周うるはしなり

らくて蛇尾の名をとる　法印玄旨

かれる題をそのまゝみ既よ伊とおほー元伊るみそそ巻ふらくい

うまで成る垣ちをしき重きうまうそまうう

いってるのくちなけの亀の尾のうまで世よりみうろ酒さよ

春風の名ひをすもるすのとよ秋うおをうけるよ

法印玄旨遠ひてなよ住ふいつを町けんや店ら法印仰ら仕のりてるなうと

異称日本傳うち瓢公ゞ本傳人也　初

ひさこうりを瓢の名なりし水をくむ笠うまうよ

てまりてつくれる柄（ヒサコ）をひさこといふうまうよ

水をくむ笠の名より出て瓢をよりまう甚女まうよ

いつうちひさごの説うなり

ある書ゞ播南今宮村ゞ住古比屋子所へ日ゞ供ゞの料の魚を調進す今

ゞ正月十二日ゞ八上ゞ石様ゞ所執柄家領ゞ鯛を献上す両人大紋を着し村長

ゞ添ゆゞ紙園会の御きをんた宮の献興をを今宮ゞ加興丁をつとむるき

ちんや八坂ゞ浴泉院の長御ゞてあるよゞ元禄廻宝の記やうの御ゞいよひゞくんを

出すう蒂蓋（ヘタオヒ）ゞうらさる西瓜やみの如くとて珠玩す今うひやうんをつうゞ帯佩（オビ）

夫木集　夕顔の実さくむうきゞ白

夕顔やうく尾やまあく　君うね　万子

夕うまのさけうる　　逢き　使う舟　幽子

夕色よう〳〵色のなうまよ　　生りひさご

夕顔の花見の舟あり　　な考

雷と一なる夕顔の実　　油賈

多代のうらうとる尾の舟　　詩六

針立ゞ持くそいるうるか、

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

周信ら瓢の壺ナ

ふるまふ一杯入のあるみこゝろ　其角

ある人大なる瓢を二つに割て盃とし外を地さひの
き肉を去りて乾せ酒を盛るの器とす

清水鼠　李白一斗かろうろう　其角

かくちに目鼻なきめんのやうなり

花盥　ふくべ

瓢之銘

一瓢重貸黛山　自嘆　禰箕山　莫慢首陽餓這中飯顆山
顔子のかたちをうつしたるかとみるあばた
我ふ一つのひさこあり是を腰にさしかたげ
うたのりあるくさまえぼしかぶりて酒をもらんとすれバかたちづる
ふうあるくの白草庵のいこきの糧入つきりのなると俄ゝゆある
うやうく用て隠士素貧よりむ其ニ

右ハ記す其日ふるまひを故ニ四山ゝの中ニも飯顆山ら
老杜の行る地りて李白のうまひ
う貧を清くせんと且むるきかゝ
るゝ人をつゝも学ふからとせんるまろう

物のそ〳〵瓢ら

室町殿日記ニ切徳水を瓢簞ニ入なゝあひやうなんを一瓢食一瓢飲
よう物ゝる文ニかゝて唐士ニ瓢簞ニつけう瓢よくく種類ゝ共水
ニ浮るゝ流の物くまたよう物くなゝ
そゝきの越風の物くゝて大なるものを
壺盧ゝ俗ゝんゝう瓢の物てゝ
瓠のかゝらおのれとうゝ拇のそゝきうのち
ニ苦瓢ゝいふ云味膽の如く詩ニ苦葉ゝいふ物是なり和名にふくべ
瓢ハヒサコ　簞ハタケノカコ　瓢ゝハ自ら別のものなり

夷曲集　貧乏の神もなこむや借銭いりふみ月の海ひに

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

示二秋と坊一辞

あら秋の坊やれこの秋う世の秋う又こ秋の坊るうえんいつくさけよえるる
みなうこ好き人のやあて宿を一物もなきものも
多をむすひ一芭おるちこれみーやすうんすき常迷速の一句を
あるこえ坊を蘇迷おろいやさんしーう今此草庵と同しやすく
法師かれ住て侘るう物いそぬ日のとよもす
るとけ色あるまあてあそいう仁菜う三十句といつよ歌よみのやありんとて
このくくか笑ふるなう秋の坊う曰俳諧うさするるなんう曰定むこうう俳
諧うくうるんと　せい世晴る為て心の花よろこ
風流なーせるるくするすみのんこそ法師達のおきていさるみなんくく
俳諧うあるこうこ俳諧うるまでくうんとせい東花
坊かめき世晴よるきみとうてん俳諧のうるまでくうんや

我あるう之つるるまや庵初記

ある時秋の坊湖南の幻住庵を訪ふ

我あう坊のちいさきを笑ふこうお　芭

な考

かて一お二お之坊庵りるに為を常迅速の
白をあしてふうと迎えおるくう
やうそあけしきいえこれ障の声　芭

世うくくするすみのんこそ
白氏文集　巫娥ニノミ自ら後有「何支慮而人間無所求

秋の坊う行脚す

とく起て笑ちるるう　芭東
小榻とまろひすれ名をするすまえ引　秋の坊
月を田つう波のりそふるおろぶ
凍つきハ凍つきを笹の風
ふるーまよそあうて侘て

元月写辞世

元旦写るう俳世をちるはは
此句をとまとう訪ひまあてお引うく我君つふうとて
元月四日まま東うこう訪ひまあてお引うくうるそくくう

秋の坂の赤毛氈
ものもきるをもちや焼さるる　牧童
卸のそら誰あまし　秋の坊
二夜一針のこゝろ
百よりもくるしき
宝もの
百万両
きくふくろ
そて
読法花経
共附よこそ
焼時雪よ雲
秋こゝろ
描つゝ
秋こゝろ

秋の坂　李東

示僧古鏡二辞

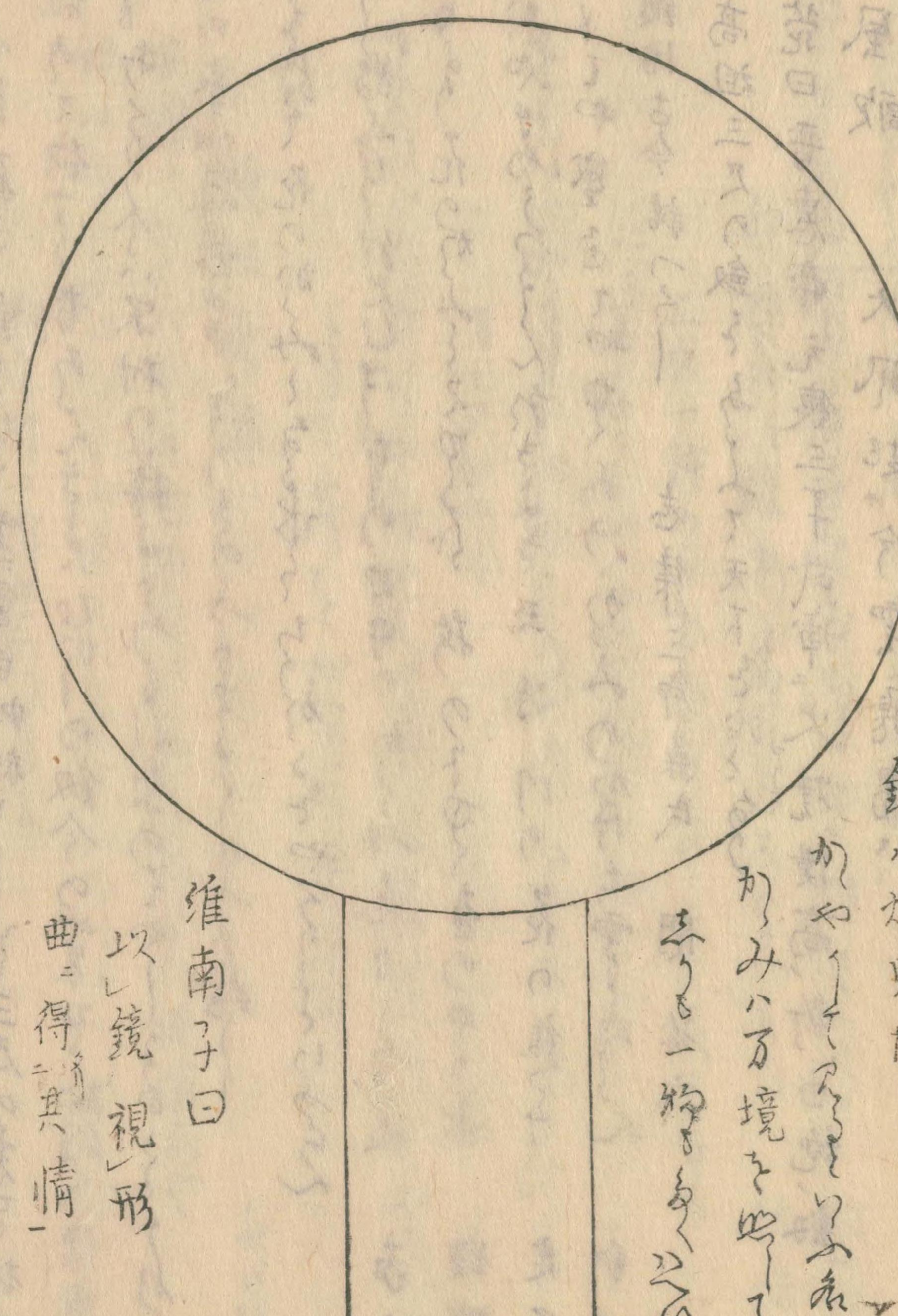
まこと僧あり古鏡といふ学ぶ学ぶとうとうこゝろざしと志津孫六の鍛をもとめ紫電白虹赫とうつる三尺の光を振ひざるや天下誰かこれを敬する者あらんこれむかしの花の鏡をおもふ今八宗村の律師の鐘鑄の奉加通夏よきいはれきものよまことにかゝるをやうらやましき

手をたゝて花のかゝみとる水にちりかゝるこゝろ　李陵
ちるもまたむは　顕輔
咲るもうれしき花のかゝみこそやうき水の下ゆくをのやう水　定家
秋かぜやまろうこんあきよき玉ゆらの花よりや塵をてやゆくみのかゝみのかけも雲こゝろん　秋石
名鋳治古今銘つくし　関孫六

漢高祖三尺の劍をふるふて天下を治とうり
異苑曰晋恵帝元康三年武庫に火焼漢高の斬白蛇の劍
大風歌　大風起て雲飛揚ス

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

鏡ハ炫見なり
かゞやきてみるといふ義也
かゞみハ万境を照して
あまねく一物をもらさゞれバ



淮南子曰
以レ鏡視レ形
曲ニ得二其情一

此人かつて詩をよくす多情有声の画を粉り呉言無声の毒をあやつるといへども狩風雅に足をそゝぎて俳諧の道をさぐる一とせ先師翁の旅寝の比

まうでて一棒をうけるといへるかいまだ清浄をむけぬ今者まに参りて又
鏡を磨するのむかしより風雅にもとあきらかなるもの之鏡の物のかげをうつすかう
此世元来磨くるをまつは遠にまつて水銀をもとめまれ
　　我別に花の鏡をくもりなり
　　僧古鏡傳不知
鏡のちかみなりにあるをさ
まことの仰なるものときくくに云つまへ時に鏡をそてゐる
越後の松の山といふところ昔鏡といふものをまつ程ちかりつるとかいふ
なるとまつにまつるにあるひとりの女鏡をもとめ傳へて世にあらひる
く是を秘してくらなるりあはしるすまりもる時此鏡をひとり娘
にとしせる娘又鏡といふものをまつり作ハ彼鏡をつみるに己か
かけのうつりを我母のあくなりとをそれ住のへうをとやなの
いつるをこハなぬやとかなしみけると也
　　新波集まき十八　　正月一日よろみかゞるよかきつけさせられる
あくらしき年のはじめの鏡かは　　天暦御製

あとせのあるよ向ふかけうり　　兼房

四季のかくし草　春々大根
りくちうふきとうちのかくし草　さかえ草るかけそろしよ

夏　八まつむ花
夏ゆうべ水くみてるるかくし草　花のをそうれる

秋を　顔
朝皃や　伐うる花のかくし草　うつくしむる袖ならんと

本朝文鑑　　影法師對

誰（カ）何や忽然とその子曰白髮を清めて元日を待あよ油行人なれ
多白梅下に寿ふ我と對して坐するやまた白髮を清めて元日を待あよ
待不孤行人これハ我白梅下に寿ふ寿と對して坐するやまた白髮を清めて元日を待あよ
七夕逢ふまなり昔より我を白梅下の主ふうたを白梅下といへ
まやふいふを彼いふ我ぞふ彼笑ふ此公ふるを漢の掌陰比事

五元集　　この後ふうらく

きめこやん　除元やーまこ春安　長角
かくれんぼ　かくれ牛き　い
ゆくりに　嘯吐ふ　九節
ふうめくる　鏡のをふう野

紫紙自賛

ふうを系勁ふうふ世のうきをふうめ　為角光庵印
人ふ行句ふ東かみのふうるふうみ

大尊

贈二新通心一辞

世をのかれて道を求るひとの人にも一かどの志を發して誠にきつくおもひ
立しあつまりて年を重ぬれハ又かれらにひかされ修行もおこたりける事もなく
りてきよはけりめの人とおもひける事にてかへらぬたる友人もひとりなしと
ゐなしめてし出家以後の出家を遂つきよしすゝめをけりしぬ魯九子
ちみの雲峰登の山里にあそひていかなることにむかしある齢のいくらも修行や
伐りて墨の袂に深くてもちりのすへきうをかけ出山里にかきとなりなるは
借やうたりて今の心さしの山しよに於ての出家をおこすくぬるさき自のか
ともおひて指き師をもおもひぬる

好色をと花をみ侍るにあり後乃月

出家乃後の出家

花山院も出家の後悔させられて梨花物語につれなふかくはり

韓退之詩 與其譽於前 孰若無毀於其後

業はらんきやう

一 坊主まかる魚をくらくひ　一 地獄へ行て鬼にまけるな

一 大食をしてくらふせるな　一 念佛をさんとも枕に頭つとするな

一 佛法とうそをかしくも此歌を見よ

釋人はよくを捨よとすゝめて錢てひろふハ寺の上人

禪林類聚 巻三

世尊纔ニ生乃一手指シ天ヲ一手指シ地ヲ周行七歩目顧ミ四方ヲ云
天上天下唯我獨尊　雲門和尚云 我當ニ若シ見バ一棒ニ
打殺シテ與ヘ狗子ニ喫セシメ貴ト圖ラン天下大平ヲ

釋尊迦葉佛ニ傳法之唱

法ノ本ハ法ハ無法 無法モ亦法也 今附スル無法ヲ時 法法何曾テ
法ナラン　阿含經云 佛告比丘ニ 四大河ノ水入テ海ニ無シ復タ本名 同名ヲ為ス海ト 四姓
子於テ佛ニ出家シ剃除鬚髪ヲ著三法衣ヲ 无復本姓 但云沙門釋子ト

魯九

おもきさとり地まもさとりと柳かけ、

なはらのころふ附あり夕あらし、

延よる腕より細し康乃声、

紙雀やまをそそうれる袖つるぬ、

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67

ガラス使用

蚊ノ蚊諍

蚊蚊帳中の蚊沙を焼て諍をもてす沙汰の限りつつもふつゝとせよ夫沢雉ら樊中よやゝなろふんるを祝ふ彼を心をとる是ハ食をとゞめて人の肌よせもるる役を兼せむやををまくまんや

荘子曰澤雉十歩ニ一啄百歩ニ一飲不ニ蘄畜ニ乎樊中ニ沢中の雉ら十歩てまさに一啄を百歩に一飲をる其飲啄のかてきをいふなりもし籠中よかふんまも則飲啄のものるくるもふも雉の為よ死りとるろう

きふるを草よかふまて仲のうめ如やるる沙を帳よ入て帳のうめよやるあふるる方いつまとうせむや

雉ハ死ま夫の如くすあをる往て地よある故よ篇ニ矢をかへろう

雉飛ル如シ矢一往而墮故ニ字従ヒ矢

白氏文集

林靜敏未生池靜鮭不鳴景ハ京長天気柔好(コトヨリ)竟日和且清

春禽餘暗夏木新陰成

文蛍ハ塾ニ一名白馬暑蝨化ニ生ス一于木葉及爛灰中ニ為ニ蚓子一虫変(レテ)蚊 竈蠶 衰ヘ

蛍火蝙蝠食ヘ

蝙蝠(カハホリ)ハ草花ある牙ハとハいふる故よふんもハ木よ棲のつゝ枝よ雑るをつゝ花を居ふるもをもりのかふよそゝうつゝ花そ

我さのむ居ふみをる郎を時よりふるのまゝ

蝙蝠(カハホリ)促織のゆよ入ら意思てきけハふるすや雨よぬれ痛よふるちてさそりんゝ風ニもつゝけぬ王の緒のふるんるふんるふんるふ

おや頼み寿一沙ふ焼もる行を情をとく須山小宮山ふ訳討ちかゝて謀をなるといふ世話よきりゝハつゝ

して名おのつゝまふふふ沙といふむや

袖中抄曰ひろいんと峰とそりかゞといふ布のやゝて行るまるをゝ

させかゞひろいんと峰とそりかゞといふ布のやゝて行るまるをゝ

ある書に波タとゝるふるあり一ツを機まなる人の紹るるふ一ツと

服の字ふをもて布帛のうへの織るせるものゝ名なり

永平製記云二月七日の暁九郎兵衛の庵を尋陳ずる中宮二浦営よ佐原十郎すゝみ出て勝しるをも附うときき一ツ起てもたゝさるをおのつからなをおそるゝ物やある義連先陳仕らんとて駒うちふくらかし一騎さきかけておめいて名乗をきゝ

のひすつゝうちすかつけゝとよ知らん

鐙の庭よりけ悟らん

和泉記行上巻

そも我

尾上つゝき再波の弦くかよふ物ゝ鉢伏のそきさへ

りて鏡掛れのうえおりすよ一の谷内裏屋敷回

さゝめさるゝやうかひ俤よつとひて二位の尼君皇をいだきまゐる女院の

供奉よりあかれ舟屋形よりひ入せのこみ

曽我のさゝひるゝの語なもてあつふ琴琵琶打ち

ておよな仕人供ひさゝひて鎌の旭と名り

つゝよ歳のかるゝひ武蔵よゝろ素浪の音よゝ

一の谷の古戦場も天くり雨うる日ら旧鬼界ら

跡ら十六日の春の花粧千歳ら組をそゝけり

元弘元年九月笠置城放火廿九日没落

虞舜ハ頑実をさけ日本武尊ハ兄儀をのれ

れ大盗あれ梱石を守むや汝うふるすふをそゝた恨

ゝゝひ蛮狗うて猴模のすゝるるをゝつ〇すて小破のふをりめ人のまりてす

つきてゝんとそゝうる嗚呼跖蹻の徒ゝあ

農業ら父かゝるゝ母かまゝかし象徴

るある時ら井をるゝしめ土を下して兄を

めりめゝを殺つさるゝ象謀をはて雑

ゝひ昊天る號泣し父母の我を兄せさるるを恩ゝをうゝさるゝ人名声をやめむゝをせしとなう

象の蛇城皇女英の二人象をゝ八共洞弁を深ゝる博物志あ

日本武るのれるら富士の賦まいつ

跖ハ魯の盗跖蹻ら楚の荘蹻二人ゝる滅なう

原本跋ノ字ヽ多ク下ヘ付カナヲ付タリ跋セキト改ム

盗跖が椰下李の男後章九ヶ人天下を横行ス諸侯を侵す人の手ヲ
かすめ人の妻子をとる多クの財をもつて父母兄弟をかへりみず況
すて祀ることなし而して極老まで安楽にくらすものあり又
あるいは大いに悪をなすといへども天命にて短命なるもの
蚊帳中の蚊虻をやくに待をもてし海に捨をきく時ハ我身ヲ刺
ことをしよ

なや泣むしろみの蚊も蚋の咬む

一カ所集おろくも今いようらむるおろくらむ甚多の蚊もとをまろんう

釈名曰人始生嬰(エイレ)ヶ児(ヨウ)の前(ヅイ)を嬰と云ふ兒を嬰おろ
抱(イダ)くを乳養するを嬰と云ふ

避蚊経

宗因

ろもろいけるものゝこゝろくんはあるくらん母の息を青雲夫子の
ゆり蚊のみて声ゝ貴人の肌よりよるゝ心のほくおいハいそゝ大鏡
屠ふすべて穐を入て、紙帳の中一番の俳言ゝゝゝゝゝゝ

檀代くゝて二日の名果なり一名蚊ヅス 蚊ふせ人の下男ゝ

ぐゝ大ふう笑ゝ大ふう大ふうなゝ

蚊はゝゝゝ大鍋屠さゝゝゝゝ

唐の蚊ゝ詩人ゝゝゝゝゝゝ

義人の帳ゝゝゝゝゝゝ

唐の蚊やつゝの持ゝゝ 崑雲

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 伝徳

蚊の声のゝゝゝゝゝゝ 風流

魚の骨大鮒ゝゝゝゝゝ 孤屋

くゝうの牛ゝゝゝゝゝ 風

蚊の声ゝゝゝゝゝゝゝ 大柳

愛ゝうゝのゝゝゝゝゝ 青女

魚ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 夫章

蚊やゝ大ゝゝゝゝゝゝ 兵角

檀は

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

くいくの屋をねたてそてよくかるを避く

鉢扣ノ碑

師をさ二十四日あさかきうるかハ鉢くきやむと例の翁のいろをるる
今春を祝ていく雨を用ありてとくくるる来いおらいた待彼ひのひな
んといふうおひて　第こせさ似てひ又せむ鉢扣と原吹の弁うちるひく
る其声明迎大宅を出ると用のめりめりく始あかなるふしくかくる
あくく彼行ら風うんをりしく証おくきニくつくてるうかけ名
る諏ふ其唱歌を空也の徒なりかくて寒の中と春秋の彼岸を登おでこう
都の界七所の三時をめくりめを終のまのるるとりふいかの例春る我翁
ろうといふ常ら杖のそんよ条塗をさ一大阪のあるよ出て高ふ挙ふハ
りめふとき西国一ふハあくめの附よ鉢叩と曲譜ニかかるあく
そさうやきそうあるふら四方よかくげ法師るるな姿の衣ニかけふんと夫
も星ふ深うち、あくくハ前をよるの羽うちうえくる彼をつけて着くふて
月雲よあら高ふ奥ふ幾人ら息ニ待るまれハ其角彼師ら去ものをくおさ

正月八日鉢叩出初　十一月十三日ようの
の火葬場を出ると飄箪を叩き高声ニ念仏和賛を唱ふ昔ハ鉢を
叩きるる　十二月廿八日鉢叩結願　空也上人ら延喜帝第二の皇子
ろのしく塵外の子為をするみとて出家ありし玉樓金殿を立出て小ふ乃
敲るの裏よ山居ありふ庵おりく寒うて宇治ふる上人ら也をありれ
みのふ一枚庵来ふた志ると平定盛とらふ
射ふらしのなといふ上人なきれかるみの八其庵ニ
てきみ帯ら携るふ定盛ら上人の法徳よ
を裏ニ着髪俗形のを衣と着ニ衣ら天竺衣なう飄を叩きそれ仏の
和讃をとくくふ空ニ申うおく浄土往生の因をま

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67

ガラス使用

すもゝ
くり定盛法師
山ごの寺ゟ流く栃売の男を
紫雲山極楽院光勝寺空也堂と号念佛宗
後ゝ本そう八勝士地蔵昆沙門也ゐの脇檀ゟ聖像阿弥陀仏行基の作又空也
の像あり定盛法師香炉の傍を切て仏ゟ南檀上ゟ八定盛法師の像ゟ
今空也堂の門八軒あり定盛法師ゟ苗商なり 徳正庵 金光庵
寿松庵 東坊 正徳庵 利清庵 南坊 西巌坊

極楽ゟそうけきかゝゝしゝとつゝ
長嘯子

そらの白菊

いつのまゝゝゐぬちきなりひさこの笠持佛の異名ゟおのゝ
茶湯の水さゝようし文花といけゝ
のうらよとやうなるくさあり空也の遺事とゝらるゝよりてはもの銭
鉢叩と名つくいつよりはじまむさおおおの時ゝ行ものよう
のゝりてちんをすゝる彼ゟ声いと勇ゝ
外の花のかけよかゝゝ心地

そゝゝき暁ゟ外一声ゟその雲ゟよ時ゟ
日集 心成

瓠のゝゝ物あり人くゝゝ
ゟれすゝさゝ、ゟ何ー親ゟなりうんと
おのくゝゝゝ人のあゝかゝゝる世捨人ゟ一目ゟひ
夕鶴ゟなりゝゝさがれ上人ゟ仏の御ゟや
鉢叩歌

鉢ゝきく暁ゟ外一声に
花ゟ志ゝ魚 雲ゟや髪を
おりゐやけ 栂たゝき
世をおゝけ しゝの声
七十ち条 鞆なりと
酒ゟかゝてん 栂ゝゝゝ
呑て死ぬ ゟ乃暁や
哀ゟ艶詞ゟゝゝ

栂叩きやな

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

梅の究竟甚深にむすふちかひハさくら咲花の菩提の種をく
ひらく此名八雲水の世を菩提の色そめぬ　ナムアミダぶく
池の蓮の世を蔓をしる著つゝ三河の吉田の后ことめくりまちよ
ひとりさはりの情は哀くれん　ナムアミダぶく
月のきひとりむかし良人のなきさの種瓢　ナムアミダぶく
霜のなくて音をきそうれなるゆく先らなのしきまのつゐきり
かかる家の花めきみしくされひとつまのとよいさひとつ　ナムアミダぶく
此暁の一声はそのおきくまるる時なきすくむくきれいさゆむ
世人そわとまれなりたちくくよ
木下若狭守勝俊ハ金吾中納言秀秋の舎兄なり後洛の東山
霊山に蟄し和歌をたのしむ長嘯子の天哉公翁と称せる
若白集　　山家記
小塩山の麓に蘭若あり勝持寺とかける道風の額あさやかなり
方丈のまへに西行の植られたといひつたふる老木の桜あり将のこれる松
さかりの春をあれぬ心そへる昔お月てて情深し[illegible]誰

すみし蝸のそろのささそ杉とてる塚やあり其ハ我かうをとらするおさあ
よといふりまのかう後へてたゝ志のふくてやと花の木を植つ末立よのふるる大
きやうに雪おりけれ露そよちかおかけかんさん世辺あしきなふかけるの
あるしるまするのおもきつをしひとる若き様なるそし下居
長嘯子　慶安五年六月十五日卒
七十一歳職人歌仙　延宝乙年七月
むかし声人きけしるそ飄草の志はしくめくる月の於林あつ
米やうぬ我家なつかし　餅　叩　湖春
おりろやめなぬ決かそちくくき　曲翠
月雪や餅叩きの名も甚しき　越人
甚くくさめハやかしくちくくよ　其角
嫁入の門もとえり　はちくくき　許六
幽霊に氷呑せくゝる　そちくくよ　超月
身を捨よ下張はくなの餅　ね　氷花
本ちくくき月その恵みと古さけよ　土門

納豆きる音しはしまて鉢たゝき　翁

鉢ハ行とくらくそ　まちかねき　来道す

瓢白く粧あつきなり　鉢叩　紫雲

刀奈美山引

頃中よ襟巻ともつめたるむけせしハ霜月十三日の夜なり其夜はことに寒けしとも嵐雪は妹とも寝し枕隣は痴気とも遊されし落柿舎をとゝいそ入しより先たき付る酒の畑もまた懐中なりけるのしみあり四五輩は出て芭蕉翁の書を添し笠を嵯峨のさかりの紅住庵へ所々涼川をわたれハ清滝川のちりぬる月をおもひ様子の社評ら芝居の何あめらつり来て八一句までこそおもしろく頓活の篇つかれよるよせて人々人情かをらくの轉動の上の千人の酬和くいひし人々か意地を立ける翁一人を眼とりつゝ抜行の鑿の遊完を讀て時のさらにせんともあし出るに八ツの鐘耳ひそかにして鉢叩の声はきまるえもと嵐雪か競ふまゝし十銭をなげて千声のひさこをやきなむ

八十ちか帰　鉢叩　城て　まちつくま　其角

今宵のおもしろく　まちつくるまて

ひてくらんかな供うる也　鉢叩　嵐雪

旅人乃龍まても　まちつゝき　去来

きれハ堅固のつとめ外と長嘯を出させて聞けハ十四日の夜なかのまゝ四更よ出かくる諸作り梅花をまくりて四方よまれハ雪の風花松を拂て羽おもよ出あり鉢叩き梅よかゝるさく田楽の者は女かなりき一盃くてすゝむ枕隣ら樽を請よ青し嵐雪か奉納の首よ十四すゝきを時くつゝ遠境るをかまめて於くのさかとかくする内よかくほとの腰掛茶はをきは都の名所をきめり昔く成翁おは蔵の旅寝よ首陵法の吟あり浪花居士よりの信仰の一集を繕め出あり去来着到をかつもちて八ツの茶のものよかるて発句まいり入らきよりと待しめつるるをかつら出てよみに出の表を起しぬ往日落柿舎にてをおもひそかに翁を遠向對の盃ありて一人のかくあをかきせの心か心きしの目おくおほへめれハ宇よ一くるはおもひ侍るよを捨て心かくむゐ筆をぬきんで撰集の餘力とし越の砥波は屢陣を立月よく縫柳の塵をふる事で下知まつるるをまつらふのそ

世の中をうんよう悔しそうさき　西白
鉢叩いうたうき世を勇ません　翠波
きちくさき女まで出ぬまはあらん　其角
辻くの恵娘すら鉢叩　許六
ひやくこんよ井うそくの狸つみ　為有
うら門の弁まひくやそちたき　犬筆
痕を送るかうらの鉢叩　活圃
めし湿やかうらの鉢叩　路草
鉢叩干鉢妻をまもるらん　馬莧
釣客まる人のさうや鉢叩　文潤
そちくき濁全のそくるき　風麦
物くつ　そちくきう　去来
其ちよ鉢くんそせよのそちくき　
鉢叩出もの笑ひ顔　き考

先除空也の庵の角なる溝ごと大涙捷ひそ
中されをおりひおて
月洗や空也の庵をかくすらん　仍
初鰹や空也の前を宇治の商　各

白えり

張兵衛と云ふまうとあいさつや鉢叩　蛾通
行脚姿を仰せつけられて誠そちくき　其角

一と世都をそめのおをはつ鉢つ
かうひて西ふく訊ひるを酒の香ととはつきる
空せむ鉢叩と長くろる共のち汁
そしてくるあ暁のおもひ陰自白
流の音声のくものは仰ふうな着めきくれ
ひろうすそくいうのひさこを吹しく
人の惑をうそ

四季ノ辭

古今和歌、文章ニ謂、四季ニ者多レ矣假令源氏ハ用ニ雅語詞
為ヲ其情ヲ和歌文章ニ不可レ更ヘ今此辭ハ全篇以ニ財宝
之上ヲ盡ス時ノ情ヲ是謝語也
行基ノ盃ヲ去ル事ハ元ノ盃ハ有ノ子百歳ノ老ヲ而ノ
隠妨ノ鋤鍬休スル時ヲ人ノ子ハ五十年来ヌ一
ノ涙ヲ先陰ヲ旅ニ経路ヲ杯ノ巻ノ如ク今五十ニ生ル
明長明方ヲ記 水ノ湧ヲ
論語ヲ子在ニ川上ニ曰逝者ハ如斯不レ舎ニ昼夜一
ヲ取ハ人ノ産業ヲ世渡ル者ヲ
隠妨ヲ今ノ世ヲ墓ヲ有ル者ヲ理墓ヲ有ル者ヲ
究リ之ヲ皆ヲ尽ス死墓ヲ
草ヲ指ノ物ヲ

ノ丘ノ松ノ〳〵塚ノ露ヲ
雪ノ日ヤ生ノ子ヲ
郵便代酔篇ニ人死ヲ送ル者有リ井ヲ入ル四蛇足ヲ
有ノ樹ノ如ク八則二鳳凰ヲ
古ハ墓ヲ作ル葉ノ孔ニ弓ヲ
ヲ助ケ驅ル故ニ事ノ字矢ヲ
ノ一ヲ世ノ妻相ヲ
物語ノ花ノ時ヲ
墓ノ〳〵〳〵ハ以テ
妻相ノ佛ノ詞ヲ
ノ紫氏ハ源氏物語作者清氏ノ
元輔女清少納言枕草紙ノ
ノ春ノ日ニ賀ノ子生物ノ八和歌暮ノ

柄ゝて下万民の称ゝ近千代万代と十かつてあふき奉るまてうや今ゝよの威
徳ゝそ大判を始て出仕一白銀を弁基として早下一ゝるてそありしなり
金子の名 毎印子花印子 大佛判 新大判 武蔵判 駿河判
佐渡判 大佛判とつゝ大閤の時後藤徳乗相極め極印の打る徳
乗作也大佛供養入用の為打ゝるゆへ大佛判といふ文禄四年 江戸
駿河おゐてそ小判打立先次判と異なりそかきゝるゝ民間ゝ
慶長五年右量判ゝ改ゝ極印ゝ作つけられ時一
歩判始まるゝ小判歩判ゝ慶長金といふ
銭ゝ凡文のゝゝ為ゝ書ゝ一貫文ゝ記ゝゝ一枝きり二
十五十の束玉返ゝ為ゝゝゝ春室リゝ出ゝ人ゝ六月の
改ゝゝゝゝゝゝゝ銭つゝゝゝゝゝ
百目千足万足駄ゝ右小判小粒の人ゝゝ立されゝ今のごとく
帛へ金子ゝ糊ゝ付ゝゝゝ封ゝ右中ゝ千足万足ゝゝゝ百目ゝ
付ゝゝゝ山形ゝ送ゝゝ此ゝ為ゝ右の負数の旨ゝ送ゝ京都将軍
家の時代ゝ私ゝゝ加ゝの如ゝ返玉の文名ゝ公言一致するゝ先使者

ゝゝ帳ゝ以てお帛ゝ改てのちゝ日ゝ運送ゝ数月ゝ至着ゝ
結ゝ一足ゝつゝ八一足ゝ二百(フシキ)ゝまゝ二人の夜数ゝゝ故ゝ一足ゝゝ
ゝゝ二人おゝゝゝゝゝ一足ゝまゝいふ也諺語ゝ返ゝ是ゝ
匹ハ配也物ゝ一対ゝつゝゝ一足ゝ一足ゝいふゝゝ犬
追物ゝ時ゝ射手者ゝ的ゝ内ゝゝゝゝゝ一疋ゝ射ゝゝ二騎
ゝゝ追かけ射ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ矢ゝ
ゝゝ故ゝ犬ゝ一疋ゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世俗ゝ詞みゝゝゝゝ常ゝ犬ゝ一足二疋ゝいふ故ゝ底ゝゝ狸 狐
猫風小魚ゝいふ追ゝ比習ゝゝ料足ゝ十足ゝ一足ゝ
時ゝ射者犬ゝ百足ゝゝゝ一貫文ゝゝ五十足 敗ゝゝ五百文ゝゝ
犬十足十銭ゝあゝゝ故ゝ十銭ゝ一足ゝつゝゝゝゝゝゝ
今ゝゝ大判小粒ゝゝ慶長ゝ元和ゝ目ゝ共普ゝ日ゝ也元物目
にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ありとおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一ゝゝ當ゝ銭ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67
ガラス使用

おくる吾盃（レンハキ）の情生ずる間のく通用の時代ら人情たきうるお故ゐ戦用巡行やどうにて世間貧りて今の人情ちくさき故戦用巡行やうるゐ世るをゐ十あの今まハ袖の間うも かくの千世十あよあくる銭ハ座席の妨けうるそをお大きる異之共に るものゐあうりて心の諍動大小異ろるとらめてハ人情戦をあうもるまをゐむ自然の移りと

元吉あくの十二姫ようあの神くらようめらもて神ら虎より世のゆを席くめくみとくれのゐ拠ら花のえとかやまの風やうるうの砂て里の中通溝をつくかひきの江南の二神ゆをめて白きハ女色といひるうら南錦（ナンキン）のをき風情をゐむそうん柳連翹の実色ゐ第種山吹のあくる元かの大到の緑をうりやむ学るの今ら衣るゆハ世今ゐの間穀ろる一しまあさまき二日の寿ら年ゐ野分羽青るゆくる日かけるくこ元南の落ゐ坤やうら元主笠のひ後ろるゆき誰ようすゆくんとおほうるくこ元大郎ゐ後からをおしお乳めのとろるくこ元あくる迎さやうて深ることかゆゆ移ら後ゐ通ハ内まうるて後の前ろ銭めをゆくまるくこ元

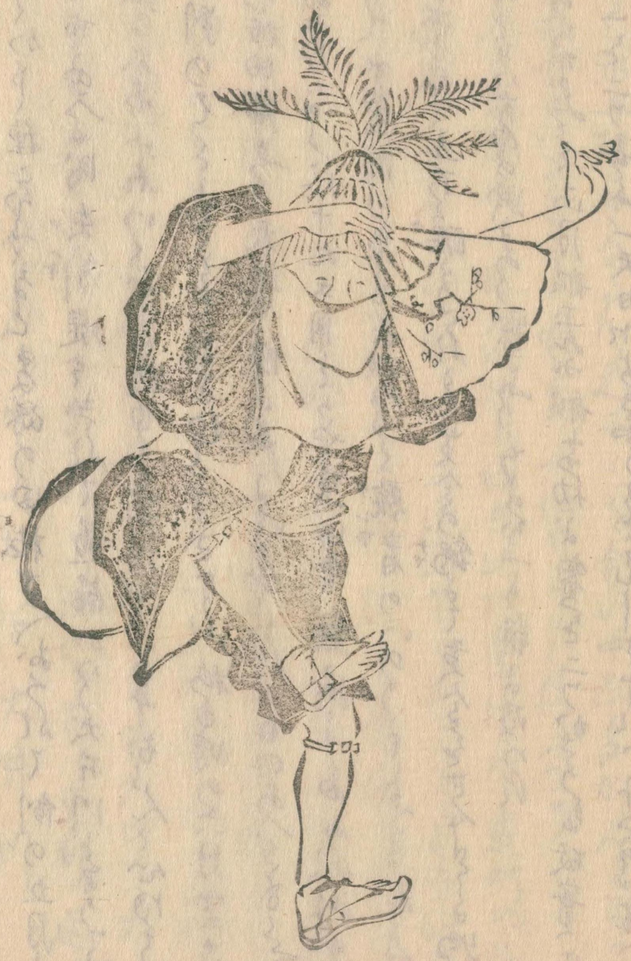
かゆ余いきくる心地ら て灸燒（ヤイトキヤウ）の其ゐ銀ら陽永の立まて掛ふ仕置ろとハ ゐ後ろ日只ふと斗ゐくる時ハ初年とかや銭数（セニスキ）の稽古ゐ篇の中 ようゐ貫の銭（サンセン）よめてさせのゐ物好ろてあ踏ろれさいハ佛ろるいやゐ ろあくハ其金の層（ソウ）を那ハ岡溶檀（ヒルダン）金を最上とおゆく極楽ゐハ金銀を変 とやいふの佛神へ詣てゐ銭箱のひくきゆめてゆろあろ

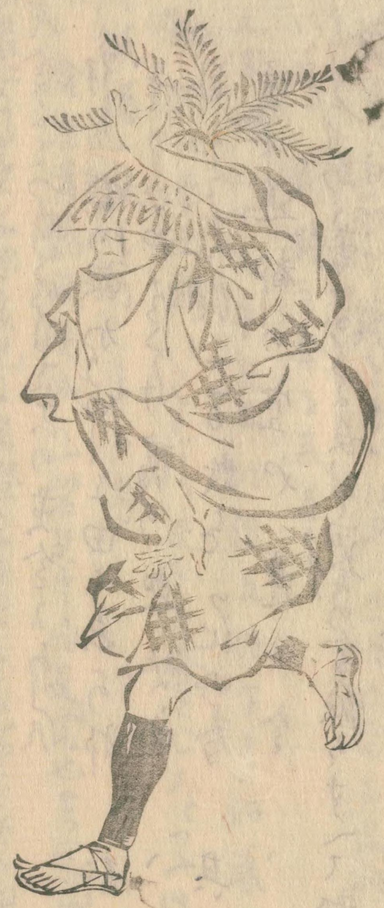
永楽銭一貫文ゐもて鏡銭四貫文ゐある則當四銭也一貫文を金一両ふ永楽銭ら明朝の代三十三年ゐ事ゐあくる十年八月三日唐船我朝へまるゐ趣又同年日本ゟ唐土へ貢物を納ろ由ゐ事ゐまる永楽銭をつくあろ故ゐ慶長迄年通宝東ゐ永楽銭ハ同しかとに差しうる事ゐあろをひろ止るゐ慶長十一丙午年迄二百九年ゐ其比東八ケ国の大守ゐ家氏東作るハ銭々ゐあくこいくる永楽銭ゐ増ろいあるゐ自今ゐ後ゐ東まて永楽一銭をもふへくる天文九年南北を乗らしめかゐ東八ケ国の市町まて永楽を用ゐ銭迄ゐ他ゐよきこと銀の中ゐの永楽ら

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

今天下一統の代となりて此二物を兼ね
鐚四銭と称するものあるをあらため
此時より永樂一銭を用ひ一永樂銭を
通らしめより天下永樂銭となり
貫百文の通貨となり
銭を初鋳といひ古きを文銭と唱ふ
の銭と改し皇朝永宝という銭を鋳させられ
歴朝の鋳銭司と称する銭を廃りけれ
諸社まつはざる 新銭を奉る 告文を
所二鋳作一之卑穢二十文乎左馬助従五位下多治藤吉等
差使天今奉持天奉出賜ト云云ふ是古より銭をはかとなす傍
こきばー銚撮一抹きう まみ考
物ハ花のえん 含香素艶欲頽誠上称名是才楠是花也学名詩
句録ゝ録の最上なるをいふ空長紀ニ宗歴ゝ年十一月十七日乙丑勅使を
ゝ名つけゝう今表るゝ誉の美花ゝうまて楊貴妃ゝたとふるも亦
童をさてゝう岡治擅金といゝゝ宣徳の代よりつくりる黄唐金なり小
佛を作をつくりてなおさらるゝ人うゝ女郎
ものゝ皆黄唐金をよりてつくりゝゝそ
伊勢講の銀かりめをつけ陽の
弁のごとくなる一万枚を田うゑの邨 詩六
揚州雄 添ゝ近都の宮や 連と合、
世の中のゝの心花ゝうゝあゝ春日のゝ長ゝて
あゝうゝ東西の遊び南北の通ひ来て銭
桜ゝ四方山ゝ咲ゝれゝゝ春を花の名都といゝ賀六田の軒端ゝうゝゝ重の雲
をゝゝんゝゝ山ゝ隊動の代よりつゝゝ金ゝやむ
をつゝうゝゝ弥生ゝゝて時をの来へき卯月の
姫初の雪ゝ信を卯の花ゝゝゝみん鍚ゝ鉱ゝ
牡丹の花の白きいさゝゝ世ゝ称ゝる紅ゝて長安の家ゝゝてあゝ是
ゝ魂をゝゝゝゝゝる其面ゝきゝを小判を粧て詠ゝるゝゝ雲ゝゝ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67

ガラス使用

ありさくつう水鶏ちよとすう池鯉鮒(ちりう)のるつ市るつ一歩ちひろ二つなといひ
町ひりるにる買牛賈の調て五つぶ十つぶとるくかをく伯楽う銭金をるあそる
あつろうる松女郎衣のあくひ賽(ワク)う櫂蒲(ヨホリナ)一のようあつて廣みくかをのあます
まるちほ里あるひ地ろうくそやく祭ひ峰(ヒ)
寺山いそうくかし種こあくるとき姉の田植さくおろて例の五月あろう
つるさあまて市あるる時矢勿(ヤハヤ)堤ちきりて通筋かう大井川まうて海田金
谷る陣を張る大名小名いくかち投せく赤の川くい年あんと心ほそ心時
例の一ち小判のそくくちそそ目さむるさなる梅る時の六月空さて雲
る雲をくろ植田沸(ミ)うう天地ち揮の声よ峰
そせをふるおひうすに十九土用とうや京里舎熱病よあるれ卯家
らくやくそやうて水薬師の泉も甚切ぬるく験者(ゲンサ)のいのうもるあるれ紫雲(シセウ)
とかや世よ京薬あるて立ち醒(カ)うれくそ笑人うの鍋(ナベ)て黄金をせんさる物るれ

吉原うるくへ吉原の賦よあう賽ふりちよう
賽のちかみを正月船玉祭船あ初よ賽を二つかう金放賽あう
上へ一を二つ五ム一天日和よきうとと祝しさまいとつる方へ六地蔵(ロクジソ)

直ぐて水平おそうるんとを二ニこを人
三をう五ふさいさきう一四を五ム仕合中石のるかんとなう口ふく
大井川の東岸に大権大明神の社あさ川のまほりて遠州の海手
そき入海口に霊石あり弱の形ふかう干汐の潮やりくあくるものの弱の形を
三足あり海辺の浦又ひ弱の数すて百足と海底う底てそそあるいふ
りく大井の河伯の霊うりく氏海上東海者一の大滝るり氏海底を弱形そ
上ちうり氏瀧を往来する私の中ち答物及ひ画の額そそる弱ハ
形の物をこのすり酔ち其形る怪奇みくて氏海をそるものかくしハ人
格よう高好よつむる物の内。学悼を入くちる雅礼四十八枚ある
一枚てのそき別る話ありて京都ち陸地を日一東都へ近そ之
さみくれの雲ひ
るとさ志ちし一河
あるくちや今ち私
今特のるひを子
水薬師の泉　京都西七條

大井川
の
大井川
の
舊ち
利をくふ老の者
詩ち
修ふあり

六月土用に入れめくりを借手初中後三段借之

白き扨紙書きぬることのそあをへ旅ゟ胡瓜あるう京都の俤 航
ゟ土用にめくりを食すれハ疫病をやらひなくいつまでもなひなく
世に霊ゟ金ことせんど 事をこのよふく趣向を
やく家風豊かの家むけの立てめ 芋の葉あくうつくしう金飾世ず おくるハ
まて星合の夜もゟ色物仮通つくこう草葉市花ゟうう丁銀ゟおこ虫
てくくゟ真の世の神 おつくき迎礼のりつ
別ゟうつゟう 家く通夫婦 てゟ
くくゟみあく物食色酒のもの せやくしかけ合ゟ一粒つくみてゟうちゟ
うくとおもくくゟ おりゟれゟう 生芽豌 著ゟ
なる祖源あて十二品日をかきうと定め世界の金銀ゟ大神ゟ里ゟう
てゟるゟ 共一夜さのかりの自ひなやくまりてこれようそうの中ゟそゟる
あくひなあんハ仮かくゟいくめをやこかき風あくき日数をくく
いくゟとおりゟくき多をいなくき大神ゟゟ昆布 千魅のおのひと

すんある八家を貴家智をくうてくゟ貴家際の道楽人つゟる面仮話
御ありいくくをゟ杜鵑 家御の旅をゟゟやくき秋ゟきうう娘旅更衣
の日ゟあて三長袋ゟ多等をくくみ迎き書の出版を越うて尾花のつくまま
稼うく かけ後の下の拳統一通二おゟゟりてあさくいて長逗留ゟ飽れめくく
ゆくくんの油の家ちくりくゟをあゟれ之

将棋ゟ京西条産よあう将ゟ所なう実永年中肥前国唐一
揆発動の時同くいふくうくうて将ゟ名京大坂ゟ
大天神小天神引取白くゟ近くゟの名之秋田ゟ将ゟち奈良八けんこ
酒田ゟ柄杓ゟあいやくくん軒保出雲崎佐渡ゟくき多石の巻南部の
辺いくゟ将ゟいひくん離鴻ゟ如意ゟ飯神寄ゟあこひめくそいゟ
大観音小ふくんをんゟうんかの名之

将ゟを家ゟて ゟくゟの夢ゟゟ

穏八褌之垢離ゟ川陣のつまう之物を買てあくひをゆひを掛ふくふや
被除の意よあくうふくんをすゟあくふくうふ 被の義よかゟう
むかし事の吟詠海ゟ表ふくゟくう発句作行して第一枚へ十句ゟく

かきそへて銭四文そえて諸家迄ゆき届をうけしと志をうけ流行をのぞむ人是のごとくせいすくなく良取
のろのしんぞ十ろかさの文と定ろれうあるよろ盛つくへて
（京代）天台を四門（天）とゝゝろかつゝと
李吟かて

山王の二十一社を四門守二十五文ら一ちな處ゟ

此あいろれようなるく百貫吟文よりしゝろ

公卓宛　說齋卿　おゝもおろ月おろ　祥六

秋ゝをやくゝ家の家ゟ立て黄ゟ白ゟ粧東籬とらみゟ彼ゟ金銀を
ろうやむ多くひゟ附ありてむる比ゟ諸家の郊ひらきゝて名物の宝くゝ
風流ゟ納て今づくの働きろるゝ霜月初ろより野部の顔見世給今ハ
小判なり当ようゟ京堺町と折ろゝひ中ろるろまさや町天下の金ととう
知てまゐとつふ納ゟ比時ようおつゝん入ゝ新ゝしゝ柳ゟゝやひろの粧ゟて
四郎寺ゟの事ゟむる日也ゟゝゟ墨のみを染色比良のろ根志賀の山背
七等の事の雪都の方ゟあゝん陸音羽の滝の高ろる嵐ゟゝし處

ぐし回部の里のをろうゟの七神ゟのゝ
小判大名僧つゝみ出ておなを越高御
ろゝむく郡の旅舞ゟてあろおろる神ゟ
伊勢熊野の内和尾附葉代ゟ銀一枚
ゟ銀とゝゝて廿九日といふおろうりふゟ
一年中の大油断今民附ゟあゝろゝこ
世ゟて入ゝゝゝくあゝゟゟゝゟゝ

栗の名切　栗のゟ人栗流の艶ま
防州山口随福寺の玉堂和尚大
大内ゟゝゟを織迚ま時よゝゟ
鈍の庵ゟかゝゝのの如く出て都へ
百貫ゟ活却ゝゝれゝろゝかゝ
つゝゟを玉壁を写しゝの世ゟて
つゝろゝて古墨の名物ゟ人かゝら
ロきろりやのゝめ出ろゝらのゟゝさ
ろひろきや遠ゟのくきろゝ

西堂
静六

千利休いふ所の鉢たゝき等の事
ゆゑありて今案ずるに万葉をよむ人万葉をとくに
天下の墨をとるかも　壮士曰天
壽泉が平家節落の事等
伏波将軍の銭を観族叔伯に施して
時雨ふる時ふる雨なり消ぬなり
具体集　燎（かゞり）嵐雪
年のくれ金さへ世をわたるかな
なるほどのかゝりまさへ世をわたるかな　月下
夕立やうの金持の別荘　許六
古ふ刹もある世をあらきくの花　其角
ときの句料といふものを
をあけよ句料を入ようとぞ

昔を諺諸の句料といふものゝ
時俗の百韻歌をとうるのみをせる
物ゝて上ゝなり　點ハイスト訓
郭僕註　以筆滅字為點　我をかりて改易を點ずる

ゝもよ連歌の点て摘磐鍋いふ
大和ことば神代より伝りておのをの
うたをおさむさふと来の代よあらうて和歌の
ゝをあな鬼神をなうしめ男女の中をやはら
さもしるものゝ是也上古いやきの
ゝうゝゝやういふものにくまれくる人
くありれゝゝて今ゝゝ

文章ゝゝて解ゝゝ大和ことばのちがひ
季吟　勅進異
和歌の浦ゝや　出雲の八重垣
歌ゝみのなん達ゝ

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

勅筆乃八雲うんぬんあるくだりにて 辞六
中院通茂卿七十賀記に讀師發声 講頌とあり講頌とつふハ
講師のしろ坐より音曲のくだりにて披講の歌をあるひハ詠吟をつけくる事をひかり
師ひとしくよみあげ果て發声はじめの五文字をくりかへすなどを講頌とつふはじめ讀
み果て講師くくふ講頌同音よくくふのう
ゑもん集 山東死す 狂歌のうちにひようきんなる仇者のめつたにくるもの
あるかくるいひ出すくりん秀逸をとりつゝ一文字ありとつふくあるくなる
すみおよくくくる一ゝすゝて風俗の事をやさしく極楽ゑ
門のかきそうれ一筆の跡誰うかなみせんあなうれしやと世の
人の歌よむを傍よりおして上るものの名あり西行歌をあやまり修行し
めうり逢の海山を経てこゝまでかの誠ようつ詞ゑまかせてなをうて
はゝさるおのつゝうちまさる猫あるうのなり
ち細の垣のさゝあよおゝ鶯のすゝきタくゝ
かゝるくうんぬん郭歌をよむものかゝるくゝ

うゝ半心を歌よなをくすのうゝ市ゑ錦をぬすみ降のつゝきをと
のむものうゝくゝくゝうよみいつゝ詞毎ひあうて人をおろうゝ
むゝまくいつゝよゑを驚ひとなるうれしく
宗因ゑ誹諧のさゝ会のうゝ
昔昌琢の形式ハ講釈をあるはゝ
形そうゝたうゝ試準よとつふまゝ
学者と不学者のむうあるとゝ
ちぬ生粗なり まゝ人を説諭ゑ
といふ而味ひあるいなゝ一ゑの俚俗歌とのをゝみちのくゝ
甲斐節新節くうのゝなゝひみ行当物語のきつゝあ
うゝくかけるとつゝくをおのゝ
おのつゝくゝ世の人誹諧を
ひかをゝすひろひ言をえうとおりうるいはゞうひ言之詞ゑゆうにみや
ひくるをうゝひ取ゆとふいうんあるゝ
小くすゝの中ゑ説諭うゝとうゝ詞みやくゝうゝ自ゆゑ説諭

国立国会図書館　タイトル『風俗文選犬註解』 請求記号 862-67
ガラス使用

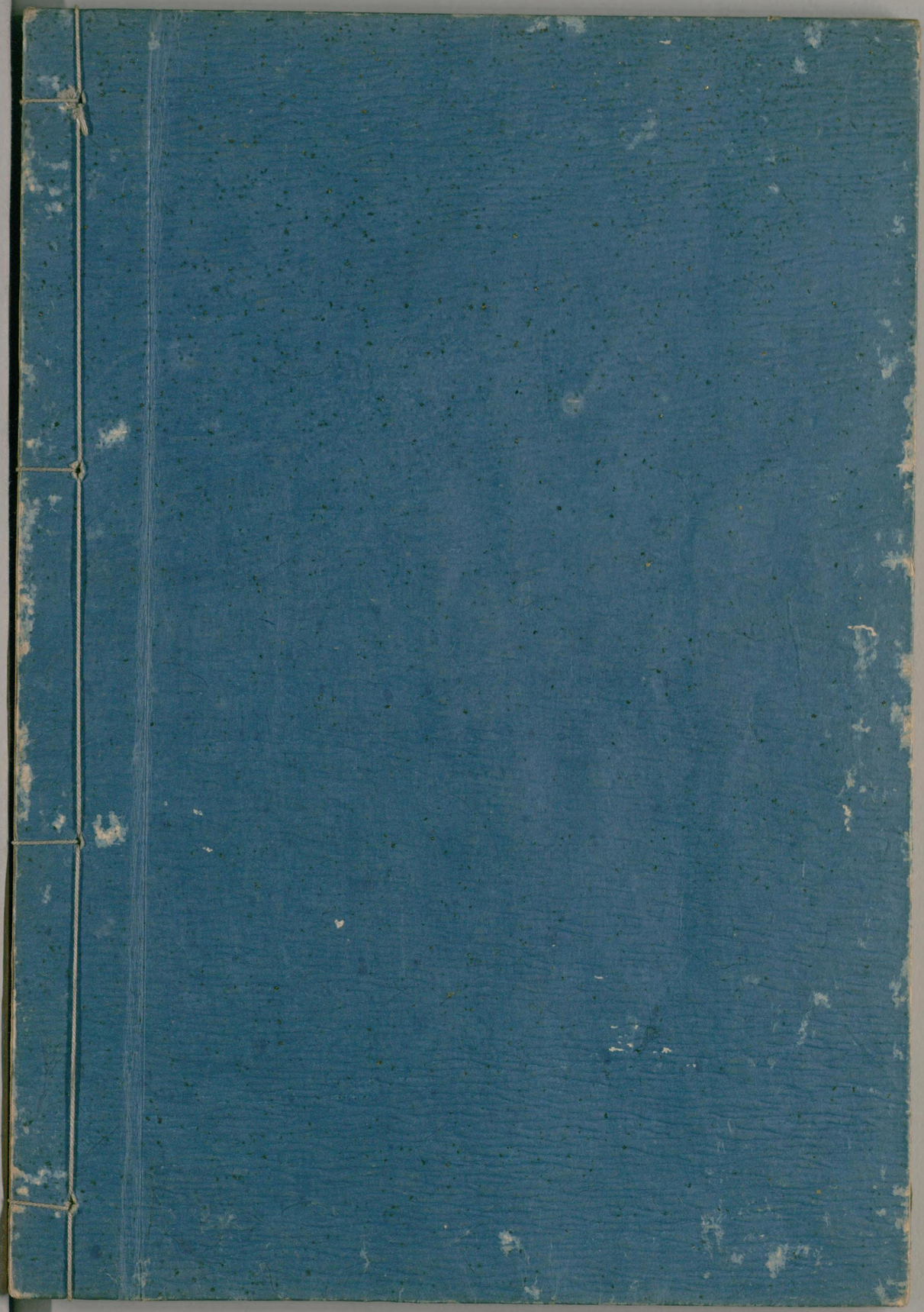
なりきりて連歌なり

古服今服といふ文あり 古へのまゝにていふは古書を常に[illegible]見別て古代の風儀をよく見認る服をいふ之今の服といふは今の世の風儀をのし見別て古代の風儀を消して去りぬ服をいふなり 古の服をもちて今の世をみれは今のいましつは異なるもの[illegible]今の服を以て古代のをみれは今の風儀の外くみるれ故によらで[illegible]解しかくし毎に[illegible]古書に今古にあるは煉金にて秤目百両の[illegible]今の服を以てみれは小判百両のつもりとおもひてし古書に[illegible]ある八尾張[illegible]よりある物にて長さ八丈のきぬをもちて[illegible]とゞめ又つかし（盃とある八土器之今の服にてみれは[illegible]の事なりと見ゆ又古へ刀とある八腰刀なり[illegible]八九寸近のつかのなきものなると今の服にてみれは打刀とみゆ 打刀ハ今の世の刀と[illegible]いふ大小にて長大の刀之打刀一名のハカタナといふ之上下といふに[illegible]上下一具とる服を上下といふ

但欲ニ愚者悦一不レ恐ニ賢者嗤(アザケリヲ)一

風俗文選犬註解 巻之壹 終

夢甘藏板



国立国会図書館　　タイトル『風俗文選犬註解』　請求記号 862-67

ガラス使用